



Title	初対面からの継続的対面データにみる話題のデフォルト化：ディスコースレベルのポライトネスの観点から
Author(s)	谷, 智子
Citation	大阪大学言語文化学. 2011, 20, p. 75-88
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77795
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

初対面からの継続的対面データによる話題のデフォルト化 —ディスコースレベルのポライトネスの観点から—*

谷 智子**

キーワード：ポライトネス、話題、継続的対面データ

This paper discusses conversations between two women, by focusing on topic management and applying Brown & Levinson's (1987) politeness theory. Brown and Levinson theory has been criticized for only analyzing relatively short interactions (Usami 2001). Usami then proposes the need for research, which she describes as 'discourse level politeness', in which longer interactions are examined. This paper, therefore, discusses discourse level politeness with extended conversations.

The extended conversations (each approximately twenty minutes in length) were between two women and recorded eight times. The participants met the first time at the first session.

The focus of the study relates to how particular topics which one participant doesn't want to talk about at first are mutually admitted. This occurs when one individual, D, starts talking about a personal topic which another, C, does not want to. In this situation, D appears to threaten C's face, which is termed as a face-threatening act (FTA: Brown and Levinson, 1987). At this point, two kinds of redressing acts appear: one act represents positive politeness, showing that D takes the same position as C; the other kinds of redressing acts are FTAs, in which C and D intentionally threaten D's face to compensate for D's previous FTA (against C). In this second act, both participants' faces are threatened equally. In order to maintain balance between the FTAs against C and those against D, the two individuals cooperate to threaten D's face. In terms of those acts, topics are mutually admitted, and considered acceptable for discussion, at which point topics becomes the default state of conversation. After the second session, they talk about the same topic by showing positive politeness in a way that was hitherto unobserved.

From the perspective of discourse level politeness, this paper analyses the dynamism of politeness and serves to show the importance of discourse level research on politeness.

1 はじめに

本研究は、初対面場面から約半年の間に 8 回収録した継続的な会話データに基づいて、相互行為のダイナミックな変化をポライトネスの観点から考察するものである。

* Discourse Level Politeness and the Process of Achieving a Default State by Analyzing Topic Management (TANI Tomoko)

** 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

継続的なデータにおいて、会話参加者間の関係の変化に伴い話題が変化する (Nakayama 2008) と考えられることから、本研究ではポライトネスのダイナミックな様相を考察するため、会話の中で選択される話題に注目する。特に、はじめは導入することでフェイス侵害となった話題が徐々に両者間で許容されていくプロセスと、話題が許容された後の会話に注目して、それらの箇所にみられる巧みなポライトネスの操作について考察を行う。このことにより、従来の研究では示されることのなかった、会話参加者間の社会的距離が初対面から変化していく過程における、ポライトネスのダイナミックな様相を詳細に示していきたい。

2 主要概念及び先行研究

2.1 ポライトネス

本研究では、これまでのポライトネス研究において最も包括的であるとされてきた Brown and Levinson (1987、以下 B&L) のポライトネス理論を鍵概念とする。B&L は、フェイスを人間の基本的欲求と位置づけ、それには、他者に認められたいというポジティブフェイスと、他者に領域を侵害されたくないというネガティブフェイスがあるとしている。そして、フェイスを侵害する行為を‘Face Threatening Acts’ (以下、FTA) とし、ある行為を行う前に FTA 度合い見積もり公式¹により FTA 度合いが見積もりられ、ネガティブポライトネス、ポジティブポライトネス等のストラテジーが選択されるとしている。また、B&L は FTA 度合いを軽減する行為だけでなく、フェイスを高める行為もポライトネスとしている。

この B&L の研究は大きな反響を巻き起こし、批判も多くみられるようになる。例えば、Eelen (2001)、Watts (2003) は、‘politeness’という用語に関して、日常的な概念と、科学的な専門用語としての概念とを明確に区別すべきであると主張している。また、Watts (1992, 2003) は、特定の関係の中でポライトネスを捉えようとし、社会実践の中でフェイスを維持している無標の状態を‘politic behavior’とし、その状態からの負の逸脱をインポライト、逆に目を引く形で逸脱したものをポライトとした。

また、宇佐美 (2001) は、B&L は一発話行為レベル、または数回の短いやりとりを考察しており、より広範囲で見られるポライトネスは考察の対象となっていないという問題点を踏まえてディスコースポライトネス理論を提唱した。この理論では、ディスコースポライトネスを一文レベル、一発話行為レベルでは捉えることのできない、より長い談話レベルにおける要素、及び文レベルの要素も含めた諸要素が語用論的ポライトネスに果たす機能のダイナミクスの総体と捉え、各箇所の発話を、会話全体のさまざまな傾向を加味し

¹ FTA 度合い見積もり公式… $Wx = D(S, H) + P(H, S) + Rx / (B\&L 1987:76)$

Wx…行為 x がフェイスを侵害する度合い D(S, H)…話し手と聞き手の社会的距離 P(H, S)…話し手と聞き手の相対的権力 Rx…行為 x の特定の文化における押し付けの絶対的なランク

た上で分析を行うことの重要性を指摘している。そして、上述の Watts 同様、会話において存在して当然である状態を、デフォルト、つまり無標ポライトネスとして同定し、そこから逸脱したものと有標ポライトネスとしている。本研究では、ディスコースレベルでポライトネスを捉えるにあたり、宇佐美の理論を参考にし、会話全体の展開を考慮に入れ、特にデフォルトに注目して分析、考察を行う。

2.2 話題

まず、話題の定義は、三牧（1999）に倣い、「会話の中で導入、展開された内容的に結束性を有する事柄の集合体を認定し、その発話の集合体に共通した概念」とする。

次に、話題に関する先行研究を以下に挙げる。まず、話題選択に関しては、三牧（1999）は、日本語母語話者大学生の初対面場面において適切な、または回避される話題に関するスキーマが存在することを指摘している。また、話題の展開に関する研究の多くは、話題の終了、開始など展開の一部に焦点をあてたミクロな分析（村上・熊取谷（1995）等）が主である。話題についてポライトネスの観点から論じた研究として三牧（1999）が挙げられ、初対面における話題選択に関して、主にポジティブポライトネス関連のストラテジーと FTA を回避するストラテジーがあるとしている。また、三牧（2008b）は話題の展開について考察する中で、会話全体の流れの中でポライトネスを捉える重要性を主張している。

上述のような選択話題、展開等に関する先行研究は、対象を初対面場面に限ったものが圧倒的に多い。一度のみの対面ではなく継続的に収録したデータの中で話題について分析している研究として Nakayama（2008）が挙げられ、8 回の対面における話題の種類別出現頻度に関する量的分析の結果として、自己の内面に関する話題が出現した箇所において親密さの高まりがみられることが示されている。

3 先行研究の問題点及び本研究の目的・意義

上述のように、先行研究において、ディスコースレベルでポライトネスを捉える重要性が示唆されるようになってきた。しかし、宇佐美（2001）は理論研究であるため、実証例が示されておらず、実証研究への適用方法も示されていない点が問題である。一方で話題に関する実証研究においては、焦点が絞られているため全体像が示されていない、または質的に論じられていないのが現状である。

以上の問題点を踏まえ、本稿では、先行研究からさらに視野を広げ、各対面回における会話の展開と全対面回における傾向の変化に関して、ディスコースレベルで分析・考察を行う。特に初期段階では許容されなかった類の話題が許容されるようになる過程と、その特定の話題が許容された後の相互行為に注目し、ポライトネスの変化について考察を行う。そのことにより、どのように両者にとって存在して当然の状態であるデフォルトが変化していくのか、また、その変化に伴い、会話参加者がどのようにポライトネスを操作するの

かを示していく。このように、先行研究で示されてきたものよりもダイナミックなポライトネスを示していくことが本研究の意義である。本研究で扱うのは限られた数のデータではあるが、質的に分析することでディスコースレベルでポライトネスを考察することの有用性について示していきたい。

4 研究方法

本研究では、22-23歳の同学年の文系大学院生、女性同士の1対1の会話を対象とする。収録期間は2009年4月から11月（夏季休業中は除く）の約半年間で、基本的に2週間に1回の頻度で全8回収録した。協力者は全6名、3ペアである。2009年4月の時点で、協力者全員が大学院に入学し、初回収録時にはどのペアとも初対面かそれに限りなく近い状態²であった。収録の際は、とくに話題などを与えず、自由に話すように指示した。収録には、ビデオカメラ、ICレコーダーを使用した。データはすべて文字化し³、分析資料とした。

今回示すのは、C、D（仮名）の会話である。本研究で収集した3データのうち、全対面において話題の変化が最も顕著であったため、本稿ではこのペアについて考察する。2人は同じ研究科に所属しているが、専門は異なり、授業などで顔を合わせる機会は少なく、授業の休憩時間に話をしていたようである。また、第2回収録直後と第6回と7回の間に他の友人を交えて遊びに行ったという。また、二人には共通の親しい友人がおり、その友人から、互いのプライベートに関する情報を得ていたようである。

表1：会話参加者情報

名前（仮名）	年齢	学年	出身地
C	23	M1	関西地方
D	22	M1	中国地方

5 選択話題の変化

本節では、選択話題の変化について述べていく。表2に全8回の話題選択の流れを時系列に示す。ここでは、三牧（1999）で日本語母語話者の大学生の初対面会話における話題選択スキーマとされた8種類の話題カテゴリー（大学生活、所属、居住、共通点、出身、専門、進路、受験）に該当するかどうかを示し、該当しない話題項目は「その他」と表示

² 2人きりで話したことはないが、入学ガイダンスや初回の授業等で顔をあわせた、また、数人で短時間の会話をしたというペアもあった。

³ （文字化の規則）

“↑”：上昇イントネーション “↓”：下降イントネーション “、”：沈黙より短く、不自然ではない間（沈（数））：沈黙の長さ（秒） “{}”：表情・しぐさ “0”：韻律などパラ言語的なもの “x”：聞き取れなかったもの ※笑いに関しては聞こえた音声をなるべく忠実にカタカナで再現する。笑いながらの発話には下線をひく。大声の発話は、文字を大きく記す。

した。「その他」には、プライベートに関することや、互いの接触を通じて見出した共通の話題が含まれ、三牧（1999）の述べる初対面に出現した際は FTA となる可能性の高い「危険な話題」に該当するものもある。表 2 から、2 回目以降「その他」がみられることがわかる。距離が変化するに従って初対面においては出現しにくい話題を導入することが可能になっており、このことによりポジティブポライトネスとして距離の接近を強調されているとも考えられる。

表 2：選択話題カテゴリー一覧

1	2	3	4	5	6	7	8
共通点	その他 (動物)	その他 (経済)	大学生活	大学生活	その他 (病気)	その他 (引っ越し)	大学生活
進路	共通点	大学生活	進路	進路	進路	その他 (恋愛・結婚)	進路
専門	その他 (恋愛・結婚)	その他 (休暇)	大学生活	その他 (休暇)	共通点	共通点	共通点
進路	大学生活	進路	その他 (休暇)	専門	その他 (買い物)		進路
専門	進路	その他 (休暇)	大学生活	その他 (休暇)	居住		その他 (余暇)
進路	その他 (恋愛・結婚)	進路	その他 (休暇)	進路	その他 (引っ越し)		大学生活
共通点	出身	その他 (家族)	共通点	その他 (休暇)	進路		共通点
進路	居住	大学生活	その他 (休暇)	共通点			大学生活
出身		その他 (休暇)	進路	大学生活			共通点
進路		大学生活	その他 (休暇)	共通点			大学生活
大学生活		専門	大学生活				進路
専門		その他 (休暇)	進路				
大学生活		進路	その他 (家族)				
進路		その他 (家族)	進路				
大学生活		大学生活	専門				
居住			その他 (家族)				
出身			その他 (恋愛・結婚)				
大学生活			その他 (買い物)				
居住							
出身							

まず、1回目の会話は互いの情報がほとんど無い状態であるので、所属や出身、専門分野など互いの基本的な情報が主に交換される。この点は、三牧（1999）が指摘する日本語母語話者の初対面の話題選択スキーマに一致するといえる。また、1回目の初期段階で両者によって認識されたと考えられる共通の関心事である進路の話題が全対面を通して多くみられる。それに加え、時間の経過とともに共有した経験に関する話題（共通の知人や学校生活）も増加する。このような話題選択は共通基盤を主張するポジティブポライトネスであるといえる。また、2回目以降は、恋愛や結婚、家族などプライベートな話題も出現する。これらは、先行研究でのべられてきた初対面会話の話題選択ではあまりみられないものである。よって、ある程度互いの距離が近づかなければ選択されないもので、相手との親密さを強調するポジティブポライトネスといえるが、導入されるタイミングによっては、自他とのフェイスへの侵害となる可能性が高い。実際、CD の会話において2回目の対面で初めて「恋愛・結婚」の話題が出現した際に FTA となつた場面がみられた。

次節ではこの類の話題がどのように許容されていくのかを考察する。

6 話題の許容化にみるポライトネスストラテジーの操作

ここでは、2回目の会話において、プライベートな領域に関する話題である恋愛・結婚の話題が初めて D により導入された場面（6.1）とその後のその話題が許容されていく過程（6.2、6.3）を示す。その後、2回目以降に、恋愛・結婚の話題内でどのようなポライトネスストラテジーが用いられているのかをみていく（6.4）。

6.1 プライベート領域の話題導入による FTA

以下の会話例（1）に、D が新しい話題を導入した箇所を示す。

会話例（1）：D による積極的な質問による FTA

111	D	そっか
112	D	(1)彼氏と別れたの↑
113	C	{机を強くたたく}
114	D	フフフフフフフフフフ
115	C	うん、別れた
116	D	いつ↑
117	C	(2)でも結構最近やと思うー
118	D	あっそう
119	D	なんで↑
120	C	なんかそゆことになってんけど、うーん・・・そう、別れた
121	D	アハハハ／ハハハハ
122	C	／××別れたん×
123	D	え、なんか自然消滅みたいな↑
124	C	あっそれではないけどー／でもちゃんとしゃべって別れたけどー
125	D	／うん
126	D	うーーん
127	D	なんで↑
128	C	・・・なんか
129	D	(1)理由はーあんまりいいたくない↑
130	C	別にーそんなーたいしたことじやないけどーなんかほんまにーなんかほんま友達みたいな感じやってー／でー回けんかしたんやんかー
(中略)		
132	D	うんうん
133	C	なんかー思いやりがなさすぎるーからー態度が、あた、あたしの態度がな好きじやないんちやうみたいな感じでゆわれて一分からへんみたいな感じでゆってんやん

このやりとりの直前までは、両者の共通の知人について、笑いを伴いながら協調的に会話が進められていた。しかし、会話例(1)から、それまでと異なる相互行為がみられるようになる。直前の話題終了後、一秒の沈黙があり、Dが「彼氏と別れたの↑」(112D)とCの交際相手に関する話題を導入する⁴。その後、Dは「いつ↑」(116D)、「なんで↑」(119D)、「え、なんか自然消滅みたいな↑」(123D)、「なんで↑」(127D)と立て続けに質問をする。これらは、Cによる前の発話に覆いかぶせるように高音、高速で発話されている。これらは、Tannen(1984)の述べている積極的に相手に関わっていこうとする‘machine-gun question’と同じ性質のものであるといえる。よって、Dにより、「相手に興味を示す」というポジティブポライトネスストラテジーが用いられているといえ、積極的に関わって行こうとする態度が伺える。

次に、これらの質問に対するCの態度に注目する。CはDの「いつ↑」(116D)という質問に対して、「(2)でも結構最近やと思うー」(117C)とあいまいに答え、交際相手と別れた理由について聞かれている箇所では、「なんかそゆことになってんけど、うーん……そう、別れた」(120C)や「……なんか」(128C)と実質的には理由を述べていない。また、Dは笑顔で質問するが、対照的にCは笑っておらず表情は暗い。また、Cのいくつかの発話に伴う沈黙からも、積極的に関わろうとするDの行為がCにとってはFTAとなっているといえる。Tannenは、相手の内面に関する話題の導入や、‘machine-gun question’は、会話参加者が同様のコミュニケーションスタイルを共有している場合は、会話を円滑に進めるストラテジーとなるが、コミュニケーションスタイルが会話参加者間で異なる場合は、ミスコミュニケーションになることを示している。この会話の場合は、この時点での両者の関係において許容される話題に関する認識や両者のスタイルが異なったことから、Dの行為はCへのFTAとなったと分析できる。

そして、Dが、「理由はーあんまりいいたくない↑」(129D)とCの態度を察したと考えられる発話をする。ここで、相手の恋愛に関する質問から、相手の態度に関する質問へと移行している。Dは、Cの態度から自らの発話がFTAとなったと認識し、同じポライトネスストラテジーを行使し続けることは困難であると判断し、視点を変えた発話を行っていると分析できる。ここでは、相手が理由を「いいたくない」ということを察し、ネガティブポライトネスとして、その質問への応答を強要しないという態度を見せてている。このことから、相手の反応をみてポライトネスを操作しているといえる。この発話をきっかけにCは実質的にDの質問に答え始める。

6.2 ポジティブポライトネスとFTAバランス探究行動によるその後の補償行為

上述のようなFTAとなった行為がみられたものの、その後もこの話題が続き、会話例(1)のFTAに対する補償行為が見られるようになる。以下の会話例(2)は、会話例(1)の後、数回のやりとりを挟んだ後の会話である。

⁴ 本研究におけるデータでは、この時点で恋愛結婚の話題が初めて出現した。フォローアップインタビューによると、Dは、双方のことを良く知る親しい友人からCの交際相手に関する情報を得ており、このような話題導入が可能になったとのことである。

会話例 (2): D のポジティブポライトネス、C の態度の変化

138	C	うんー
139	D	別れたあとさみしいもんね
140	C	うーん
141	D	え、なんで思いやりがないの↑
142	D	なんかやさしそうなのに、Cちゃん
143	C	<u>やさしくないらしい／彼氏には</u>
144	D	／アハハハハハハ
145	C	だからフフ

D は、「別れたあとさみしいもんね」(139D) や「え、なんで思いやりがないの↑なんかやさしそうなのに、C ちゃん」(141, 142D) と述べる。前者は、C に共感を示す形、後者は C を擁護する形で、相手と同じ立場に立つことを示すというポジティブポライトネスストラテジーを用いているといえる。また、会話例 (1) に見られるような高速・高音でたたみかけるような発話ではなく、低速で発話されている。C は全体的に低速で発話することが多く、ここでは D は C の発話速度を意識したともいえる。この様な配慮を経て、C の態度も変化する。会話例 (1) では暗い表情をみせていた C であるが、「やさしくないらしい彼氏には」(143C) にみられる笑いながらの発話から少しずつ笑いを交えながら、会話を進めていくようになる。

次に、会話例（2）とは異なるDの補償行為を示す。以下の会話例（3）では、Dが自らの過去の恋愛について話し始める。

会話例 (3): D の自らのフェイスに対する FTA

202	D	でーそのー3月↑あー3年の12月にー／なんか別れてー彼氏とー
203	C	／うーん
204	C	うーー
205	D	でーなんかーほんとはー■大学↑／の大学院とかー／にしようかなーと思つてー彼氏がいるからなんか離れられなくて
206	C	／うん／うんうん
207	D	でもなんか別れたらー・・・なんか・・・こう羽ばたけた
208	C	ハハハハハハハハ

会話例（1）でDが導入してFTAとなった、Cのプライベートな領域に関する内容と類似のDの経験をここで自ら導入しているといえる。具体的には、Dが過去に交際相手と別れた話をしている。三牧（2008a）は、FTAバランス探求行動という行為を提唱している。

これは一度 FTA を他者に対して行った者が同等の FTA を自分に対して行う、または、FTA を行使された相手が報復的に FTA を行うことで、両者に対する FTA の量や質のバランスをとるという行為である。D は、それまでに C に対してプライベートな事柄に関してたたみかけるような質問を行うという FTA を行っている。D はその補償として、自らの過去の恋愛の破綻経験について話すことで自分自身に対して FTA を行ったと考えられる。

次に、C の積極的な質問、先取り発話が見られる箇所について分析する。

会話例（4）：C の積極的な質問、発話の先取りによる FTA

244	C	生命なんちやらってなにー↑
245	D	めんくい↑
246	C	でもちがうと思うー
247	C	めんくいー↑
248	D	うーーーん
249	C	え、好きな人とかいるー↑
250	C	彼氏は↑
251	D	いないいないいない
252	D	めんくいっちやー／××
253	C	／めんくいそうー
254	D	でもーぶ、ぶ、ぶさいく好きではない
255	C	あーーアハハハハ
256	C	と思うー

ここでは、会話例（1）とは異なり、C が積極的に質問を行っている（244・247・249・250C）。C は D に対して関心を示し、会話展開に対して協力的になるというポジティブボライトネスストラテジーを用いている。この点で、C の態度が会話例（1）から変化している。また、C が D に対して、異性の姿勢を気にするかという質問（247C）を行い、D は「めんくいっちやー××」（252D）と言いかけるがそれに覆いかぶせるように「めんくいそうー」（253C）と C が述べる。相手の価値観について、相手の発話の前に予想して述べることは FTA となる可能性が高いと考えられる。しかし、それまでのやりとりで C に対する D の FTA が顕在化していることから、C が FTA バランス探求行動として D に対する FTA を行ったと分析できる。

6.3 話題の許容

次に示す会話例（5）は、会話例（1）で FTA となった内容が再び出現する箇所である。

会話例（5）：以前に FTA となった話題の許容

322	D	前の彼はどうやって付き合った↑
323	C	なんかサークル一緒やってー／なん一年間位友達やったんやんか
(中略)		
331	D	え、友達になれる↑
332	C	なれへん・・・と思う、向こうが
333	D	うそー↑
334	D	怒ってるー↑
335	C	ううん、なんか連絡一なんか最後に一別れた日に一ピアス忘れてしまってんやんか／で取りに行きたいみたいなかんじでゅったら一絵文字一もないねんやんかー
336	D	／うんうんうんうん
337	C	なんか怖くないー↑
338	C	そんなに一きょく、極端すぎるーと思ってー

この会話例では、会話例（1）とは異なり、C は D の質問に沈黙を挟まず実質的に答え、積極的に過去の話をしている。また、C による大声のはたらきかけ「なんか怖くないー↑」（337C）に見られるように、自らの体験について相手に共感を求める、積極的に D に関わろうとしていることから、協力的になるというポジティブポライトネスストラテジーが用いられているといえる。このようなことから、ここでは、一度 FTA となった話題が許容されたと分析できる。

この類の話題は、2回目の対面回以降も見られる。しかし、会話例（1）のように FTA とはなっていない。会話例（1）の段階では、まだ、初対面場面話題選択スキーマに即した話題を選択することが、両者にとってのデフォルトであったと考えられ、D はそこから逸脱する形で話題選択を行い、相手に接近しようとする形でポジティブポライトネスストラテジーを使用した。しかし、C の沈黙や暗い表情、そして、その後の D の相手の態度を察する発話から伺えたように両者が C にとっての FTA として認識したと考えられる。その後、上述のような相互行為を経て、両者によって FTA として認識されることなく自然である話題となったといえる。つまり、FTA とその後の補償行為をきっかけに、初期に存在した話題に関するデフォルトが変化し、この類の話題選択がデフォルト化されたといえよう。

6.4 デフォルト化された後の対面回におけるポライトネスストラテジー

上述のような相互行為を経てデフォルト化された後の対面回では、同類の話題内で2回目ではみられなかつたような行為が見られるようになる。

以下の会話例（6）では、D による冗談が見られる。

会話例 (6) : D による冗談 (第 4 回)

205	D	<u>Cちゃん、遅く結婚して</u>
206	C	フフフDも
207	D	仲間をまわりにつくろうと思ってフフ
208	C	フフフフフフフ
209	C	でもなんかうちら絶対、うちらってゆーかー／院生ー就職したらめっちゃ遅くなりそうじゃない↑
210	D	／うんうん

具体的には、Dは「Cちゃん、遅く結婚して」(205D)と述べている。この発話以前に「結婚願望があり、早く相手をみつけねばならない」という旨のやりとりがみられることから、「遅く結婚して」という発話内容自体は両者にとっては否定的な意味を持つものであると考えられるが、ここでは両者とも笑顔であり FTA とはなっていない。これは、大塚 (2009) の述べる、FTA となる可能性の高い事柄を述べる際に笑いなどで冗談であることを伝えることでポジティブポライトネスとしての効果を狙うものであるといえる。ここでは、Dは笑いながら発話することで、冗談であることを伝達しようとしており、その後のCの笑い(206C)にみられるように、Cにその意図が伝わったと考えられる。この時点で、このような話題が許容されているというだけでなく、この話題内で冗談をいうことが可能になっていると分析できる。

次に、7回目で会話例 (1) で FTA となった内容 (C の元交際相手の話) が出現した箇所について示す。

会話例 (7) : 2回目の会話で FTA となった内容の出現 (第 7 回)

309	D	(6) え、前の彼氏大学院生↑
310	C	うんうんうんうん
311	D	・・・変じやなかつた↑
312	C	変↑
313	C	<u>分からんでも、変ってどんな感じが変か</u>
314	D	フッ
315	D	変って／る
316	C	／ <u>でも変わってるんかなー↑</u>
317	C	でも変わってるかもしれんけど

ここでは、2回目に見られた、Cの元交際相手の話題が出現している。Dは、Cの元交際相手について「変じやなかつた↑」(311D)と尋ねる。この質問に対してCは沈黙などを伴わず笑いながら、返答している。笑いや笑いながらの発話にみられるように、この話題

において、「変」のように元交際相手に対する否定的評価につながるようなフェイス侵害可能性のある表現が用いられても FTA とはなっていない。ここでは、D によって、相手に興味を示し、協調的に会話を進めて行こうとするポジティブポライトネスとして発話され、それが実際に効果をもたらしているといえる。

上述のような、話題が許容された後の相互行為をみると、2回目で恋愛に関する話題が許容された後は、それまで見られなかったポライトネスストラテジーがみられ、このダイナミックなストラテジーの変化が、ポライトネスとして効果をもたらしていることがわかった。

7まとめ

以上のように、本稿では、対面を重ねるごとに、初対面から同じ研究科の友人へと社会的距離が変化する中でポライトネスが変化していく様子を質的に分析してきた。以下の図1に本稿で述べてきた分析結果をまとめることとする。

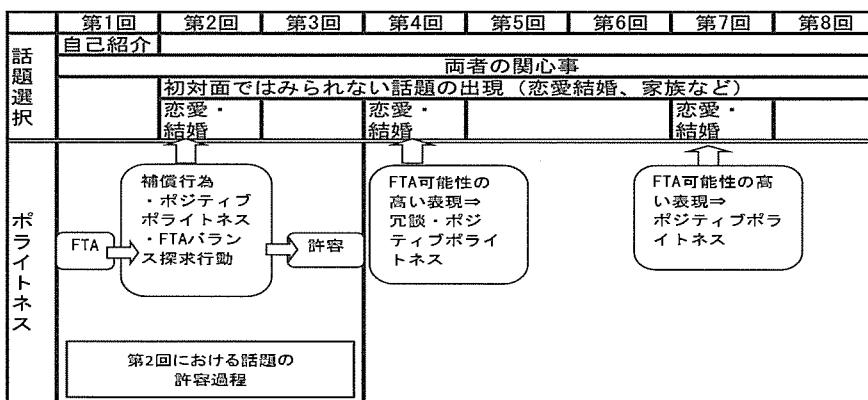


図1：話題にみるポライトネスの操作

話題選択に関しては、1回目においては基本的な個人情報がやりとりされ、2回目以降はプライベート領域に関する話題を選択するなど、話題が変化していた。

また実際の会話例を挙げ、一旦許容されなかった話題が許容されるようになる過程及び、その後の対面における相互行為を分析した。1回目にはみられなかった、恋愛・結婚に関する話題が初めて導入された際に効果として FTA となった後、両者はポジティブポライトネスストラテジーを使用するだけでなく、両者に対する FTA の量や質を均等に保とうとする行為を行うことでフェイスへの補償をし、話題が許容されていった。三牧（2008b）は、話題の展開を考察し、ポジティブポライトネスの積み重なりがよりスムーズな会話の展開に貢献していると分析している。本稿では、ポジティブポライトネスの積み重なりに加え、FTA であっても会話参加者間で質量ともにバランスをとることのできる形でなされ

た場合は、それ以前の発話の補償行為となり、その後の円滑な話題の展開に貢献する場合もあることを示した。

また、その後の対面回において同じ話題が出現した際は、2回目のようにFTAとなることはなかった。このことから、上述のような行為を経て、この類の話題がこの2人の会話において存在して当然のものとなった、つまりデフォルト化されたことがわかる。さらに、デフォルトとなった後は、同様の話題内でFTAとなる可能性の高い発話をすることで、ポジティブポライトネスとしての効果を狙うという行為がみられた。これはそれまでには見られなかつたストラテジーであり、これにより、さらに両者の距離の接近を示し共感的に会話を進めていくことができるといえる。ここから、ポライトネスのダイナミックな変化が伺える。

以上から、両者の関係やそれまで行われてきた行為に応じた、会話参加者のポライトネスの巧みな操作が考察できた。よって、これまでのポライトネス研究ではまだ少ない継続的な会話データを用いたディスコースレベルの分析を行うことで、ダイナミックにポライトネスが変化していくさまを示すことができたといえる。

今後は、関係の変化に伴い会話参加者に認識され、操作され得ると考えられるスピーチレベルや、発話量等の話題以外の他の要素にも注目し、ディスコースレベルのポライトネスの観点から、より包括的に会話を捉える方法を探っていきたい。

参考文献

- Brown, P., & Levinson, S. C. (1987). *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Eelen, G. (2001). *A critique of politeness theories*. Manchester: St Jerome.
- Nakayama, A. (2008). *The communication of closeness in Japanese*. Tokyo: Kuroshio Publishers.
- Tannen, D. (1984). *Conversational style: Analyzing talk among friends*. Oxford: Oxford University Press.
- Watts, R. (1992). "Linguistic politeness and politic behavior," In Watts, R., Ide, S., and Ehlich, K. eds. *Politeness in language: Studies in its history, theory and practice*. Berlin and New York: Mouton de Gruyter, pp. 43-69.
- (2003). *Politeness*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 宇佐美まゆみ 『談話のポライトネス』 国立国語研究所、2001。
- 大塚生子 「大阪在住女子高校生の「対立ごっこ」におけるポライトネス—遊びを伝える文脈化の手がかりを中心に—」 『大阪大学言語文化学』 Vol.18、大阪大学言語文化学会、2009、pp.127-139。
- 三牧陽子 「初対面会話における話題選択スキーマとストラテジー—大学生会話の分析—」 『日本語教育』 103、日本語教育学会、1999、pp.49-58。

- 「会話参加者による FTA バランス探求行動」 『社会言語科学』 第 11 卷・第 1 号、
社会言語科学会、2008a、pp.125-138。
- 「話題の選択と展開にみるポライトネスコースレベルからみた相互行為」
『文学』 第 9 卷・第 6 号、岩波書店、2008b、pp.32-42。
- 村上恵・熊取谷哲夫 「談話トピックの結束性と展開の構造」 『表現研究』 Vol.62、表現
学会、1995、pp.101-111。